

---

# キューピッドの鎖

阿見乃

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

キューピッドの鎖

### 【Zコード】

「Z7535」

### 【作者名】

阿見乃

### 【あらすじ】

愛し合う二人を結ぶ、それが彼女の仕事。「本当に愛し合っていますか?」でないと二人を縛り付ける鎖になる。棘のある鎖。秘密を持つた彼女が巻き込まれる災難と、出会う人々の話。

## ルール（書き方）

拙い文章でお見苦しこ点も数々あるとは思いますが、どうぞよろしくお願いします。

白い鳩が青く晴れ渡つた空に羽ばたく。

愛と平和の象徴。

私たちの周りで円を描いて飛び立つてゆく。

代わりに色とりどりの花弁が頭上から降つてくる。

白いドレス、それから手に持つた薄桃色のブーケに赤や黄がかかる。

教会の鐘の音、周りの祝福の声。

この日を今までずっと夢みてきた。

ずっと。

ああ、私は今、世界で一番幸せ。

隣で優しくほほえむ彼がゆつくりと顔を近づけてくる。

目を閉じて、唇を合わせた。

さあ、永遠の誓いを。

そして、指輪を交換しよう。

## その2

幾度となく結婚式を見守つてきた。

白い二人を結びつける。

それが私の仕事だった。

彼女は指輪の裏の名前を彫る事を生業とする彫り師である。  
ついた通り名はアモル。

別名、恋のキューピッド。

曲がりなりにも性は女、だが、彼女に依頼をしに来たものは少年とも少女ともつかない格好に必ず尋ねる。  
彼女も、そのときばかりは満面の笑みで

「男です」

それが何か?と言つのだ。

理由なんて特にない。

そつちの方が納得されやすいものだから。

また、地下にある彼女の仕事場の扉が開く。  
指輪を持つて誰かが来たようだ。

ヒールの音が石造りの階段に響く。

揺れる蠟燭の火にあわせて揺れる自分の影。まるで牢屋のようだ。降りた先には深緑の扉があつた。

彫り師のアモル。

密かな噂になつてゐるのを偶然聞きつけた。居場所も知られていなアモルに、どうしても彫つてほしくて。ついててくれた騎士に調べてほしいと頼み込んだ。渋々頷いたが、それでも調べるのに1ヶ月かかっていた。

ようやくここまで来たものの、未知の恐怖で立ち止まる。こんな陰気な地下に住んでいるのだから、氣味の悪い翁か、魔女か。アモルは男性の名前なのだから、きっと男だろう。よけいに扉を開けるのがためらわれた。

でも、わたしはあの方と幸せな夫婦になるのだから！

深呼吸をすると、付き添つてくれた騎士が心配そうな目を向けてきた。

大丈夫、と言つて、そのまま扉を開けた。

幸せの保証を欲しがる者がまたやつてきた。

花嫁や花婿はどうしてあんなものが欲しいのか。

保証は偽りかもしないというのに。

扉を開けたまま固まっているのはドレスを着た女性。

「ようこそ」

アモルが声をかけると、よつやく意識を戻す。

「あの、あなたが…」

「彫り師です」

え…と眩くなり再び固まっている。しかし今度は自力で戻った。

「まあ！あなたがアモルですね！？わたくしてつゝきつもつとい」年配の方だと思っていました」

高い声を上げながら一人で盛り上がっている女性の反応には慣れていた。

ゴブリンではなかつたのね、などと言われたときもある。いくら何でも空想上の生き物はないだろ？

それにして、この女性はいつたい何者だら？。驚くほど美しい顔に若草色の品の良いドレス。

華美ではないにしろ所々につけられた宝石類も、貴重なものだとわかる。洗練された身のこなしも育ちの良さが伺える。

無邪気な笑顔と純粋そうな目が眩しい。

「それでは、本題に入りましょう」

紙とペンを差し出す。

「ここに自分と相手の名前を」

ただし、と付け足す。

本当に結ばれたいと思う相手を。

少しでも迷いがあるなら引き受けることはできない。

心の中でつぶやく。なぜなら、私が施すのは呪いだから、と。

強い口調で言うアモルに、それまで女性の後ろで控えていた騎士が

物騒な目を向けてきた。

「一生愛しますわ。もちろんあの方も同じ気持ちですもの」  
相手を全面に信頼して、裏切られることなんて考えもしないで。

ペンを持つ細い指。職業柄ビビリしても荒れる自分の手とは作りが違うんじゃないのか、と思つ。

といつより、こんな美しい人と自分は同じ生物なのか？

さらには、あらすらと書かれた名前を見て驚く。

なんとまあ、王子様だなんて。

とすると…この人は王子の婚約者か。

戴冠式にあわせての結婚となるのだろう。

まあ、誰が客でも関係ない。

「では指輪を」

指輪だけ受け取るつもりだったのに、熱のこもった瞳で指輪を渡され、そのまま手まで握りしめられた。

「レイチエル様！！」

焦つたような声で騎士が呼ぶ。

「このような卑しい者に触れるなど」

全身で拒絶されているのが分かる。

「なんてことを言つのです！」レイチエルがたしなめてもまだ睨んできている。

少々カチンと来る。

目の前で卑しいと言われたら当然の反応だと思つ。

「ふうん、卑しい私などとは口も聞きたくない、ですか？」

眼差しは肯定だ。

レイチエルはおろおろして泣きそうになつてゐる。

少し意地悪したくなる。

「ここに来るまでにたくさん的人がいたでしょう。あなたの言ひつ卑しい者も」

おそれくこの騎士は貴族だね。

「あなたと彼ら、どこが違いましたか？手はあつたでしょう。足は？耳は？目は？」

「身分がある。この身に流れる血が」

「彼らの血は縁でしょうか。黒でしょうか。私にはあなたたちの方がよっぽど血が通つてないのではないかと思いますが」

民から税をとる王族や貴族の方が。

ゆがんだ顔をして、今にも人を殺しそうだ。馬鹿にするな、と大声を発した。

「これはこれは失礼致しました」

別にアモルは身分制に反対しているわけではない。それは国を保つのに必要なことでもある。スラムの孤児を救いたいとかも思っていない。

ただ、卑しいと罵倒する騎士や、それにもまして勝手に同情のまなざしを向けてくる綺麗なオヒメサマにイライラしたから。思わず騎士にハツ当たりしてみただけ。

「そんなことより、レイチエル様、泣きそうですが」「ふるふると震えていたレイチエルは大粒の涙を流し始めた。焦る騎士はもう一度こちらを睨みつけるとレイチエルを外へと促した。

「こんな奴のところなど気分が悪い。はやく出ましょ」アモルは素早く紙と指輪を騎士に押しつけ、勝手に出て行つてもらつた。

壊れそうな音をして扉が閉まつた。

完全に足音が聞こえなくなつたといふで、「あー、やつちやつたな

ー

：自己嫌悪。

頭を抱えて机の下に潜る。

バカだ。どうしようもないくらい。

あのまま剣でスパッと切られてもおかしくなかつた。

もしくは不敬罪でひとつられるとか。

アモルはうー、あー、と呻きながら『一步間違えればなるといふだ

つた未来』に遠い目をした。

サクリとかむと甘い果汁が口いっぱいに広がる。赤い実は水分が豊富で、口の端から溢れ出すほどだ。

アモルは今日一週間分の買い物に来ていた。こう見えても結構稼いでいたりするが、食べ物にはあまり興味がない。

稼ぎの大半は水に消えていく。

アモルは決して刀で彌るわけではない。使うのは水。ペンのようなものに水を入れ、先から高速で出す。循環するようになっているため少しの水でも長くもつ。昔の知り合いが作ってくれたものだ。

出力を上げれば刀身が出てきて、包丁にもなるスグレモノ。

それにも彌るのに相性があるようで、各地から湧き水や雪解け水などを取り寄せている。

しかし水で彌る人の話など聞いたことがないので、苦労している。

買い物をし終えて、現在帰り道。

大きな袋を持つと小柄なアモルは隠れてしまつ。

それにもしても、いい天気だ。

日差しに心が和み、早く帰つて午睡だと決意するが、それはすぐに不可能になつた。

「やめて！は、放してください…」

あーあ、真っ昼間からひくでもない奴もいるのか。

女の子には、愁傷様だけど。

自分が出て行つてどうなるものでもない。

自分の非力さは自覚している。

そして助ける義理もない。

路地裏から聞こえる声を無視して通り過ぎようとする。

「あー！アモル！助けて！」

それは無理だつて。つて今の幻聴？

恐る恐る田を向けると、最近見た顔が三人の男に絡まっていた。

「アモル！アモルッ！」

レイチエルの声に反応して男たちが振り向く。

「んだよ、ガキじやねーか。嬢ちゃん、おじさんたちと一緒にいいとこ行こ！」

それでも泣き叫ぶレイチエルの口をふさぎ、下卑た笑いをアモルに向けた。

「このガキもつれてくか。よく見たら女みてーな顔してるし楽しめんだろ」

うわ、最悪の事態だ。

- 1 見捨てる…と追いかけて来るだろ？
- 2 戦う…のは無理。

万事休す。

ここは大人しくするしかない。

なんでこんなことに。。

いつもならこんな状況になる前になんとか避けられるのに。。

せめて…男たちの名前さえ知つていれば…。

アモルは男に大人しく捕まえられてしまつた。

連れてこられたのはどこかの建物の地下らしい。目隠しをして抱えられていたので推測でしかないが。

何でこんな目に、と思つても、巻き込んだ本人は気絶してしまっている。

美しい金の髪が顔にかかっている。

華奢なピンヒールは片方ない。

薄桃色のドレスはこの間より質が劣るもの、街で見かける代物では決してない。

これで私の五年分はまかなえるかも。

思わずため息が出た。

眠り姫には起きてもらわなければ。

王子様ではないけれど。

体を揺すると、少しづつ意識が戻ってきたようだ。

「ん…アモル？」完全に覚醒した田代こちらを見ると、涙をためて抱きついてきた。

「ああ、アモル！怖かったわ！」

肩にじんわりにじむ涙が温かい。

向こうの方が年も上だし、身長も高いので幾分押し倒され気味である。

その後、再び周りをみたレイチェルは泣き出し、なだめるのに小一時間かかった。

周りには同じように泣いている女たちが大勢いた。

斡旋業者だ。奴隸か娼館か、どちらにしても質が悪い。

「で、あなたはなぜあのよつたじゆつに？」

「だつてどうしても指輪を廻つてもらつたくて」

「まさか一人で？」

ええ、と微笑みながらうなづいたレイチャエル。自分の立場もわきまえず、のほほんと笑つてゐる。聞けばその服も変装なのだといふ。

どこが変装だ。

だが、アモルはレイチャエルを見て思つ。むしろ、そう、むしろこの人の美しさは他人を考えないからこそなのか。無垢な赤ん坊のよつな。国の王妃にはふさわしいとは言えないが、レイチャエルを非難するほどアモルは優しくない。

それよりも、こんなどうでもいいことを考へてゐる場合ではない。この状況はますますきる。

貴族の娘であるレイチャエルは搜索されてゐるだつたが、これはなかなか見つからないはず。

逃げる方法もないことはないんだが、どうしようもなくなつたときの最終手段に残しておきたい。

どうしようかといふふうなつてゐると、誰かが入つてきた。

足音はアモルの目の前で止まつた。

顔を上げると自分に抱きついたままのレイチャエルを見下ろしてゐる目とがち合ひ。

どこかで見たことがあるよつな。

…思い出した。

クイルズ商会の跡取り、ハーレー・クイルズ。

昔こいつの婚約者が依頼に来たことがあった。

結局破棄になつたので彫らなかつたが、名前は覚えていた。

裏はクイルズ商会か？いや、もつと上がいるんだろう。現場監督つてどこかな。

「けつこうな上玉だな。つと、何でガキがここにいる？」

「女みてーな顔してるんで、男娼にでもしちまおうかと」

興味もなさそうにアモルを一瞥すると、震えるレイチエルの腕をとつた。

「売り払うのはもつたいない。可愛がつてやろ」  
薄い唇をゆがませる。

レイチエルはアモルの腕に抱きつき離れようとしなかつた。  
邪魔だ、とハーレーはアモルを蹴り上げた。

まともに腹に入るブーツ。少し浮かぶ体。

ぐつ、と呻くのを満足そうに見やると、レイチエルを捕まえて違う部屋へと行こうとする。わずかな抵抗感。

「何している」

それでもアモルの腕を放さないレイチエルを見て、不機嫌な顔をした。

腹を押さえて縮こまつて いるアモルの手を踏んでいく。  
アモルが呻くのを見て笑う。

レイチエルはハーレーに強引に抱えられため腕を放してしまつた。

それでもアモルからは目を離さず。

見知らぬ男にさわられる嫌悪感よりも、アモルが蹴られたことが衝撃だつた。小さな体が縮こまつて いる。

アモルは痛みに耐えているのか小さく動く。「アモル！」「ごめんなさいと、そう言いたかった。

あんなに蹴られて、小さな体が心配でしうがなかつた。今すぐ駆け寄りたい。

しかしハーレーに抱えられ、後ろを向かされると、扉が迫ってきた。連れて行かれた先には何が待つてゐるのか。恐怖で鳥肌が立つた。

ああ、もう駄目、と目をつむる。

その時、なにが起こったのか分からなかつた。膝と手の痛み。冷たい地面に直にふれていた。落とされたのか。

ハーレーの手はすでに離れていて、上を見上げるとハーレーは男たちの方を見ていた。

一体なにが起こったの？

「お前ら、女たちを外に出せ」

さつきとは一変するハーレーに驚いて声を上げる。

「はい？ なに言つてるんですか」

「大切な商品ですぜ」

部屋にいた男が目を開いて抗議している。

レイチャエルはその隙にアモルのそばへ駆け寄つた。

「アモル…」大丈夫？、と言う言葉は飲み込んだ。座り込んだアモルは首から下げた何かを握つていた。隣にいるレイチャエルをみようともしない。

話しかけるのはおろか、近づくのを許されない雰囲気があつた。

「何度も言わせるな」

「え？」

いきなり言葉を発したアモル。

同時に向こう側から同じ言葉が聞こえる。

『女たちを外へ出せ。なんだ？ 逆らうのか』

アモルのつぶやきとハーレーの声がレイチャエルには同時に聞こえた。しかし他には誰もアモルに気がつく者はいない。

ハーレーの言葉を受け、ぶるぶると首を横に振ると男たちは捕まえられたいた女たちを運び出した。

ぶつぶつ文句を言いながら動く男たちと、不安そうな顔の女たち。

やがて部屋に女が数人しかいなくなつたところで、上の階から悲鳴と怒声が聞こえた。

大勢で降りてくる足音が聞こえる。

誰だ、敵か味方か。

痛みに朦朧とする思考の中で、考えても分からぬことに首を振ると、アモルは小さくつぶやいた。

「氣絶しろ」

目の端でハーレーの体が崩れ落ちたのが見えた。

扉が開く。入ってきたのは甲冑を身につけた騎士たち。

瞬く間に大人數で部屋を占拠した。外に運び出されようとしていたレイチエルを見つけると、そのうちの一人が男に剣を向けレイチエルに駆け寄つた。それはアモルを殺すような眼差しで睨んだあの騎士だった。

レイチエル様お氣を確かに」と言い、ぐつたりしているレイチエルを丁重に運び出している。

頭にもやがかかっているままぼーっとそれを眺めていたら、首筋に冷たい感触があった。

いつの間にか周りを取り囲まれ、そのすべてに剣を向けられていた。首の皮一枚、少しでも動くと切れてしまう。

それどころか腹と手の痛みが体力を奪うのだから勘弁して。

考えることを拒否した脳が視界をゆっくりと黒く染めていった。

体中の痛みで目が覚めた。

頭、いたい。

全身ばきばき。

左頬に冷たく固い地面が当たっている。

起き上がるうとすると、手の甲が痛む。

なんとか上半身を起こすと、鉄格子が目に入った。

鉄格子？部屋のインテリアに鉄格子をチョイスするモビマニアックな趣味はない。

家ではない、となると何処だらう？

しばし惚ける。

「……」着ていたシャツをめぐると腹には大きな痣。赤紫から青紫へのグラデーションがなんともグロテスクで。

蹴られたことを思い出すと、とたんに痛み出す。ついでに何があつたのかも思い出した。

思い出さなければ良かつた……。

現実逃避は程々にして、現状を把握しなければならない。窓はない、時間が分からない。

そもそもここが何処だか分からない。

大きなため息をつく。

そういえば、思い出した。

首にかけていた銀のネックレス。

プレートにはハーレー・クイルズのスペル。顔をしかめた。  
あんな奴の名前が彫つてあるもの、いくら自分が作ったからと言つても気持ち悪い。

どうにか無効にしたいけど…。自分のしたことがどれだけ重いかわかつてる。

あれは緊急事態だったと自分を慰める。

「しようがないって。うん」

「何がだ」

独り言に答える声がしたので、自然と顔があがる。  
うわ、あのときの。

レイチエルと一緒にいた騎士が立っていた。  
しかめ面を隠すために思わず下を向くと、髪を引っ張られる。  
「つつ」

「答える。なぜあそこにいた」

おまえのとこのオヒメサマのせいだ!と言いたかったが頭と腹の痛みで口も開けない。

「答える!」

髪を引っ張られたまま肩に足が置かれる。声も出ず吐息ばかりが漏れる。  
髪から手が離され反動で仰向けに倒れる。肩においた足はそのままで。

歯を食いしばる。

肩にどんどん重みがかかっていく。全身の痛みと疲労でまた気を失うかもしれない。無様な姿をさらすのは嫌だ。

「ジヨイナス、お止めなさい!」

肩を踏みつけていた重みが消えた。

「わたくしの命の恩人になんてことを。アモル、しつかりして!」

「レイチエル様、このよつたな汚いところに来ては、  
きつとレイチエルは騎士、ジョイナスを睨みつける。ジョイナスは  
動搖した。

「アモルを上へ。わたくしの部屋に運びなさい」  
後ろに従えていた侍女と騎士に命令する。

「お待ちください、この者は怪しそります」レイチエルはジョイナ  
スの言葉を無視し、騎士に抱えられたアモルに近寄る。

「ごめんなさい、ごめんなさい…」幼女のようにそれしか言わない。  
アモルはレイチエルの声に苦笑いをする。

とにかく疲れた。今は眠りたい。

彼は月を見ていた。

月の雫と形容される」ともある自分の体。

月の雫など恥ずかしい名前、最初に言い出した奴の喉を噛み切つてやりたい。

ふざけて言つた奴を昔半殺しこしたものある。

貴賓室から抜け出してきた彼の姿を見咎める者はなく庭園に一人たたずんでいた。

厳重に鍵がかかってあつたその部屋を抜け出すのはたやすく、あれで閉じこめているつもりなのかと背後の城をあざ笑つ。

もう少しの間閉じこめられておいてやうづか。大々的な祝賀まではと国で一番威張つた男に言われたので、まあいかと思はずつと城にいた。

この世は彼にはまつまらないすぎで、祝賀とやらが暇つぶしなればいい。

そつと庭園をあとにした。

「いっつー！」

腹を押さえる手から身を捩つてにげようとする。  
「動かないでね」につこり笑つて元に戻された。

白いベッドに寝転んだアモルをのぞき込んでくる美女。  
妖艶が相応しい。ここ最近美形に絡むのが多い気がする。  
そういうえばあのジョイナスつて騎士もきれいな顔をしていた。問題  
は性格か。

内蔵が傷を負つていなか確かめる、だそうだ。詳しいことは医者  
でもないアモルには分からぬ。

あの後、なんとか気を失わず騎士に抱えられたまま地下を後にした。  
やはり、というか、レイチャエルとジョイナスが出てきた時点で予想  
はついていた。

アモルが住む王都の中心にそびえ立つ王城。  
もしかしながら、アモルは罪人の牢屋兼拷問部屋らしきところに  
入れられたらしい。  
レイチャエルの登場でなんとか抜け出せたが。

向かった先はレイチャエルの部屋ではなく、医務室。  
ベッドに横にされ、出てきたのは何とも言えない美女。

先生、白衣のボタンが弾けそうです。

わざわざ閉めなくていいボタンをあえて閉めることによつたり

強調された胸。同性なのにくらべらしかった。

美女は来るなり「まあ、可愛らしい患者さん」と言つて、アモルのそばに向かつてきて、頭を抱えた。

く、くるしい！

胸で窒息死なんてしゃれにならない。

思いきり腕を突っぱねて離れる。

あら、とにつこつ笑つてアモルを連れてきた騎士に向かつた。

「治療よ。まあ早く出でいけ」

背中を見ていたアモルには分からぬ。なぜ彼が青くなつたのか。走り去つていつたのか。

世の中には知らなくてもいいことがあるんだ、きっと。

騎士が出て行くのを確認すると、またベッドの脇に腰を下ろした。

「女の子なのに、こんなぼろぼろになつて」

「なんで、まだ体に触つてもいいのに」

少年のような格好をしているアモルは不思議そうに首を傾げる。

「ふふふ。私に抱きしめられて離れようとするなんて、そんな男いないわよ」死んでもいいつて言つ奴もいるくらいなんだから。まあ、私は可愛い子しか抱きしめないけどね。

とウインクつみで。

ソーデスカ、と言つしかない。

治療を始めるわよ、と言われ今に至る。

女医、エリーゼには一週間は絶対安静だと言われ、帰りたいと言え  
ば笑顔で

「絶対だーめ」と一言。

逆らつてはいけない気がした。

かけられていた奴隸斡旋の一昧ではないかといつ容疑は、レイチエルによつて解かれたようだ。

むしろ被害者と言える。

ジョイナスから受けた傷もある。一重の被害者だ。

でもそんなことを言つのは何となく嫌で黙つていたのに、エリーゼは全て知つていた。

「騎士が女の子に暴力なんて。久々に愛の鞭でも入れてあげようか  
しい」

エリーゼのことで知つたことがある。

彼女は今でこそ女医をしているが、昔は近衛騎士の副隊長。敵をぱつさぱつさとなぎ倒していく姿はまさに戦乙女。

聞いたときには驚いた反面納得した気がする。

ひらやましいと思った。非力なこの体と取り替えてほしいくらい。  
ジョイナスがどうなるうつとうどもいが、復讐に来られても困る。でも少しは恨みを晴らしたい、というのも本心。  
悩んでいるうちにエリーゼは消えていた。  
ま、いつか。

頭をふると、首にかけてある鎧の音が鳴る。  
無視できぬ重みで、思わずため息をつく。

するすると鎧をたどつて胸元の合わせ田から銀のプレートを引き上げた。

今すぐ捨てたいが、万一このプレートが壊れたりでもしたら。

エリーゼが教えてくれた。

ハーレー・クイルズは、クイルズ商会はお咎めなしだつたそうだ。  
王子の婚約者の誘拐と考えれば極刑もあり得るが、なにもなかつた。  
後ろが大きいと言つことだらう。

権力者の暗い部分なんかとはもう関わりあいになりたくない。  
切実な願いと大きなため息が一つ、医務室に響いた。

踏み出す。ノブに手をかける。  
いや、やつぱり。

足を戻してそのまま後退する。

医務室、と書かれた扉の前行ったり来たりすること数回。周りは一いちらを見ないよう、顔を背けて通り過ぎる。あれこれいるのは身分の高い貴族。なおかつ近衛隊長。じつと見つめる失礼など出来ない。見ない振りをするのが一番だ。

扉の前にいる近衛隊長はため息をついた。新人だった時の先輩であるエリーゼの、愛の鞭という名の死刑でぼろぼろになつた後、あの子に謝るなら終わりにしてやる、と剣を向けられた。

あのとき自分は生と死の境にいた。  
答えに悩むまでもなく。

だが、いざ行こうとするトプライドが邪魔をする。大体、初めて会つたときでさえ失礼な奴だつた。

身分の低い者なんかに見下されるなんて許されない。

しかし自分が悪いのも分かる。丸腰の相手を犯罪者でもないのに傷つけるのは、騎士としてのプライドに反する。

ジョイナスはとんでもなく悩んでいた。

再び、ノブに手をかける。

そのまま動かない彼は、後ろから来る気配に気づかず。

押されて勢いよく医務室に飛び込んだ。

後ろを殺氣立つた目で振り向くと、そこにはレイチエルがいた。殺氣はあわてて消した。

「何をなさっているんですか！あなたは！戴冠式まで部屋で大人しくなるのが王子との約束だつたでしょう！」

「だつてアモルが心配だつたんだもの」

「だつてではありません！」

じわりと大きな瞳にじむ涙。だつて、だつてと繰り返す。この姫に勝てた試しがない。

今回も惨敗だ。

「騒がしいわね。怪我人がいるのよ」

死刑執行人、いやエリーゼがこちらを向いて青筋を立てていた。こ

こが何処だか忘れていた二人はあわてて口をつぐむ。

「アモルちゃんが起きちゃつたじゃない」

見ると、ベッドでアモルが上半身を起こしている。寝起きだからかこちらをぼうつと見ている。

包帯だけの姿に思わず罪悪感があふれた。

まだ幼い少年に怪我をさせた、俺は。

レイチエルはアモルの横に走り寄つた。

「アモル、ごめんなさい、ごめんなさい……」涙をハンカチで拭おうともせず、アモルに詫びていた。

「いいんですよ、別に」

アモルは笑顔をレイチエルに向けた。

「その…悪かった」

絞り出した声はなんとか形になつた。

アモルはレイチャエルに向けたのと同じ笑顔で「いいえ、いいんです」と言つ。

罪悪感から逃れたくて出した詫びが、受け入れられることにほつとする。

レイチャエルもほつとした様子で、和やかな雰囲気が流れた。

「いいえ、いいわけないでしょ」

硬質の声に、医務室が凍る。

発したのはエリーゼ。

「ジョイナス。あなたはこの顛末にすべての責任があるのよ。ましてこの子は被害者。それを守るために守るべき騎士が傷つけるなんて、恥だと思いなさい」

エリーゼはちらり、レイチャエルの目をとらうとする。

「そして、レイチャエル様。あなたの無鉄砲がすべてを引き起こしたのです。この子が傷を負つたのも、全て、あなたが」

二人は唇をかみしめた。謝つて許されて、なかつたことにしたかったのが見抜かれた気がした。

レイチャエルが走つて医務室を出て行く。それをジョイナスが追つた。

後に残されたアモルは、息を吐いた。

物凄い緊張感。一言が針のよう。

それでも。

「エリーゼさんは優しいですね」

彼女は優しい。さつまつ言つてあげる」ことが彼女の優しさだ。

「ふふつ、まあね」

対してアモルは「いい」と言つただけ。

本心からではない許しが一番ひどいことだと分かつてやつてこる。

責めなことと、レイチヨル達に反省の機会すべしやうない。

自分の心が狭いことは分かつている。

波風を立てるのが面倒でもあつたから。

変えよつとは思わない。変えたいとも思わない。ふつと息を吐く。

エリーゼに今はもう一度眠うこと言われるのに甘えて、深い眠りに落ちていった。

寝たり起きたりを繰り返し、絶対安静が解けた頃。

アモルはレイチエルにアフタヌーンティーに誘われた。

あの日から何度も謝りに来るレイチエルに、もうどうもこいとは言えず。

「本当にいいのです」と言えば、なぜか懐かれてしまつたようだ。

まずは医務室のボスに行つてもいいかと訪ねるのが先だ。

「あの、レイチエル様に庭園でお茶会をしようと誘われたのですがボスの権限で断つてくれ、と期待を込めてみる。

怪我が治つてきた以上、断る理由がないのだ。でも、貴族の娘さんとウフフフなんてできない。

期待は空しく、

「行つてきていよいよ」と言われる。

「でも服もないですし」

アモルはすつと患者服を来ていた。毎日きれいな物が渡されるし、前着ていた自分の普段着より質がいいって…。

複雑な気分で見下ろす。

「あら、もちろん手配するわ

差し出されたのはきれいな水色。手に取り広げてみると、ドレス。

誰が着るの？

「女の子なんだから、ドレスの一枚や一枚」自分が着ている様子を

想像してみる。

…うわ。

責めたアモルを見てエリーゼはクスクス笑う。

「冗談よ。ちゃんと用意してあるから」

代わりに渡されたのは白のブラウスに黒い乗馬パンツ。

む。レースひらひら。

城で見かける貴族や官吏は同じようなブラウスを着ていたから変ではないのだろう。

機嫌を損ねるはどうなるか分からないので、妥協した。

「今から着替えますので」

出て行つて欲しいな。暗に告げる。

なのに頬杖をつきながら笑顔でこっちを見ている。

「女同士だからいいじゃなーい」

この人に何を言つても無駄だと一週間で学習したアモルは急いで着替える。

「あら、胸意外とあるのね。アモルちゃんは着やせするタイプなのね」

ブラウスの上から思わず隠す。

顔が熱い。

胸なんて、大きめだとは分かつていたけど気にしたこともなかつた。脂肪の塊だから飢え死にしそうになつたら役立つかもくらいだった。他人に指摘されるとハズカシイ。

とにかく鏡の前に立つ。

胸は目立たない。着やせするタイプでよかつた。しかし、そこにいるのは紛れもなく少女だった。

「あら、可愛らしい。食べちゃいたい」とりあえずスルー。

首の部分に結ばれたリボンも、袖口から見えるレースも。

「素材は悪くない。可愛らしい格好をしたらもつと女の子に見えるわ」

素材は確かに悪くはないと思う。客観的に見ても。

ただ今は少女らしくする気はない。

むしろ困る。

しかし人は案外見た目で判断しているものではない。五感を使っている。

だから表情、仕草などがその人を形作っている部分は大きい。

髪を皮紐で無造作にくくる。

前髪をかきあげ、首のリボンは外す。

「わあ、顔は変わつてないのにかつこよく見えるー」

ぱちぱちと手をたたくエリーゼ。

「まあ、可愛らしいの方が強いけどね」

それはしようがない。

「わたくし、兄弟がほしかつたんです。特に可愛らしい弟が」  
花咲き乱れる庭園でなお美しい女性が微笑む。噴水の上に立つ女神の像の化身のよう。

「わたくしをお姉さんだと思つてくださいな」  
苦笑いではい、と答える。くださいな、だと拒否権はない。でも姉だつたら疲れる。

アモルには聞かなければいけないことがあつた。

「あの、レイチエル様。あの時のこと、覚えてますか」

そばにいたレイチエルは不審に思つたはずだ。  
アモルの様子とハーレーの行動に。

返事は聞かない。

「忘れてください」こちらも拒否権はないのだ。  
ティーカップをかき混ぜていたスプーンが止まる。

「わかりました。可愛い弟のお願いですもの」

うわあ、弟決定なのか。もう、完璧に性別が間違われていることなど忘れてくれるならどうでもいいが。

「忘れますから代わりにこれ、彫つてくださいな？」

差し出されたのはあの時の指輪。まだ諦めていなかつたのか。  
しかし好都合。貸し借りなしだ。

「無償でやらせていただきます」

ハンカチにくるみ、丁重に受け取つた。

「戴冠式は三日後だから、それまでに間に合つかしら  
「おそらくは」

「おや、花嫁は密会中かな」

揶揄するような声が背後からした。

驚いて振り向くと、貴公子がやつてきて、レイチエルの肩を後ろから抱く。

思わず目を背けた。

目線の先にはこれまた同様に目を逸らしていたらしいジョイナス。思わず目がつてしまつた。

と思つたらふいと目をそらされた。

別にいいけど。

「ところでレイチエル。彼は？」

訪ねられると嬉しそうにレイチエルは口を開く。

「アモルといいます。わたくしの弟ですわ」

貴公子はアモルに笑顔を向けてきた。

手を差し出されたので握手をする。

「よろしく。そしてレイチエルのわがままにつきあつてくれてありがとう」

美男子の美しい微笑みに目に毒だと思う。人並みの審美眼が思わずみとれる。

全く笑つていないと、握りつぶされそうな手がなければ。

レイチエルとこんなに親しい、となればこの人は。

骨が。今ミシッと鳴つた、ぜつたい。

つないだ手（なんていうと甘く聞こえるかも）の上に第三者の手が乗せられると、よつやく離れていった。

ジョイナスを見上げると、再び顔を逸らされた。

とりあえず軽く頭だけは下げておく。借り作るのは嫌だけど。

赤くなつた手を後ろで隠す。

どうやら敵認識されたらしい。ちょっと話してただけじゃないか。この王子ありえない。度量が狭すぎる。知らないとはいえ同性なんだから手は出せる訳ないし、男だつたとしても手は出したくない。

アモルの内心など完璧に無視した一人は別世界を作り上げていた。

「あまり私を嫉妬させないでくれ」

「もう、あなただけよ」

このスープ美味しい。隣に添えられているのはクリームと何のジヤムだろ？。甘さは控えめで酸味が効いている。  
ちなみに会話は右から左へ流れていく。  
愛の小劇場なんて見たくないもんだ。

「君を迎えてきたんだ。三日後の打ち合わせをしようと思つてね」「打ち合わせ？あ！もしかしてアリオン様のこと？む？」

見るとレイチャエルは口を押さえられていた。

「レイチャエル！」

「『ごめんなさい』

このうるるる目に王子は落ちたのか。

さつきまで怒つていた顔が一変している。

目尻も眉も下がつて、正直あまり格好良く見えなくなつていて。しまりのない顔だ。結局、レイチャエルと王子、それにジョナサンはあわただしく帰つて行つた。

アフタヌーンティー・セットは瞬く間に片づけられ、アモルは一人で

医務室に帰つて行つた。

一つ並んだ指輪。

赤い宝石のちりばめられたそれらは大きいのと小さいの。横には水の入ったコップ。便宜上『彫刻刀』と呼んでいる、ペンの形をした物の『柄』を持ち水を入れていく。

すでに何度か失敗はしているが、再度チャレンジ。

とんでもなく分厚いレンズを入れたメガネで指輪をのぞき込む。内側にゆっくりと刃を近づけていく。

刃が当たる。そのまま流れるように線を描く。

うーん。やつぱり彫れない。

水が悪いのだろうか。

風が窓から入り込み、頭をなでるカーテン。

外はすでに暗く、月が天の中心にあつた。ふと、レイチェルとお茶をした庭園を思い出す。

あそこにも水があつたな。

女神が見守る噴水の水なら、もしかしたら。期限が迫っているのためらつてはいられない。

素早く患者服からエリーゼにもらつた服に着替える。

庭園までどの道が一番人目に付かないだろう。

考え込みながら噴水の位置を確かめるため窓をのぞき込む。

庭園のちょうど中心部。

ここからでも水が光つて見える。

水瓶を持つ女神像の横顔を眺めていた。

すると、その後ろから銀色に光るもののが見えた。

水しぶきの向こう側、きらきら光るそれに誘われるかのよう。

アモルは医務室を後にした。

小さな彫刻刀を胸の前で握りしめる。  
アモルは庭園の花が咲き乱れる小道を通り、女神像へと向かっていた。

銀色の何か。月の光に反射して、かがやくもの。  
アモルはふらふらと噴水に近づいていく。  
女神像をぐるりと一周。

何もない。

なぜだかものすじく悲しくなった。体の奥がきゅうっと締め付けられる。

噴水の縁に座り、何とはなしに水に映る月をすぐう。  
彫刻刀にそのまま注いでいった。

彼は突然現れた部外者をじっと観察してしいた。

ふらふらと歩いてきたかと思うと、がっかりしたような顔をし、つらそうな顔をしたそれ。何がそんなつらそうな顔をさせている?  
その後何をするかと思えば水をすくっていた。

おかしな奴だ。水をすくった後は細いへりに器用に寝転がっている。  
どんな奴か見てみたい。久しぶりにわき上がる興味。ずっと昔に消

えたと思つていたが、こんな気持ちがまだあつたのか。

落ちていた小枝をわざと踏んで音を出す。小さく乾いた音がした。  
驚いて上半身を起こした田が合ひ。

叫んで逃げるか？

今まで彼が姿を見せたことのある者は、そういう反応をするのも多かった。

彼らより小さな体の持ち主なら、氣を失うんじゃないかな。

しかし彼の予想は裏切られる。

たっぷりと見つめ合ひと、そのまま両の田から落ちる水。  
固まつたまま涙を流している。

誰とも違つた反応。

さらに、その口が小さく開いたとき、自分の血が凍り、熱く沸騰した気がした。

月をみようとアモルは寝こもるんだ。

水の粒が顔にかかる。

天の中心から傾いた月に、手が届きそうな気がする。

パキとどこからか音がした。

誰か来たのか？ふと自分の状態に気づく。

誰もいない庭園で寝ころんでいたら、不審者決定じゃないか。不審者ならまだいい。もし再び容疑でもかけられたら……。

肩の痛みを思い出し、青くなつた顔であわてて起きあがつた。

音がした方に顔を向ける。

アモルは自分の目を疑つた。

木の影からゆつたり現れたのは銀色。

いや、銀の狼。

月に照らされる毛が発光しているかのようだ。一本一本が輝いている。

声にならない。さつきとはまた違う、心臓が揺さぶられる感覚。

アルファスの章。かのアルファスが世界を憂い、自らの命を絶つた後、亡骸から人の姿をした女神、獣の姿をした男神、種が生まれた。

昔の知り合いの嗄れた声を思い出す。

何度もねだつた昔語り。

男神は白銀の毛をなびかせる。

特に美しい獣の姿をした男神のところはお気に入りで、覚えてしまつほど何度も。

月の光。白銀の獣。

夢にまで見たことがある姿。

なんて美しい。

頬を流れる熱い滴に違和感を感じた。

呼吸をするように、いとも簡単に涙が出た。

その男神の名は

その名は

「ア・リツタ・ヤウス・ティエポロ・ダ・カール…」  
言い終わる前に獣は、低く唸ると、飛びかかってきた。

草の上に倒れ込む。

自分の体より大きい狼に四肢を押さえ込まれる。

口から牙がのぞく。

びびじてだらり。このまま喰われてもいいと思つてしまつた。

抵抗らしい抵抗もせず。静かに口をつむる。

牙が首筋に触れる。

それでもアモルの口は止まらない。最後の名は、

「セナンクール」

：「今までたつても牙は動かない。

そろそろと口を開ける。

牙を前に当てたままの狼と目が合ひ。

不思議な口の色。様々な色が混ざり合つて黒く見えている。

狼はのどの奥を鳴らした。笑つてゐるよくなに聞こえることに驚く。いきなり牙を戻した。押さえつけられていた重みが離れていく。もう一度、目が合つとそのまま駆けていった。

すべてが夢の中のような気持ち。

獣がいなくなつたにも関わらず、起きあがりつとは思わなかつた。

涙の跡を手でこする。

そのまま腕で顔を覆つた。

いつまでそうしていたのか。

月が隠れる頃。空がだんだん白み始める。

アモルは庭園の花に囲まれたままうつむかうつむかしていた。

「あつ」

突然、顔を覆っていた腕を捕まれる。

「お前、ここで何をしている。夜間は立ち入り禁止区域だ」  
ジョイナスは厳しい口調で言った。

アモルは座り込み、ジョイナスに見下ろされている。  
まるであの時みたいだ。髪を掴まれた時。  
ただ耐えることしかできなかつた時。

思い出すと怖くなつた。

少し震える。

「どうした」

肩をつかむのはやめて。恐怖しか出でこないから。

「それにその首…」

なんとか言葉を絞り出す。

「申し訳ありませんでした。立ち入り禁止とは知らなかつたのです。  
あの、肩を放してください」

一気に言うと相手の言葉も聞かず、立ち上がる。

「送つて行つてやる」

いいです、と言つても聞いていない。

諦めて強引に引っ張るのに任せた。

抵抗しようものならどんな目に遭わされるか分からぬから。

ふと思ひ。

あの狼の時は、牙が首にあたつても恐怖すら感じなかつたのに。

白銀の獣の王。

女神は人の王、男神は獣の王、種は植物の王になつた。

瞼を閉じればいつでも浮かんでくる。

ともすれば氷にも見える白銀。

月の柔らかな光より冷たい。

アモルは首にそつと触れた。

気づかぬうちに少しだけ切れていたらしい。鋭利な牙で。

ブラウスの襟が汚れてしまつたので気づいた。

それにもしても、あの狼は、神話に出てくる獣の王とどのよつたな関係があるのだろう。

神話は神話。誰も信じているものはいない。

カミサマが世界を生んだなんて信じていたら、同情の眼差しを向ける。

人間の起源がメガミサマだなんて言つたら、精神病院送りだ。

あの狼は何んだろう。

たしかに白い狼はいる。しかし生息地はもつと北の方だ。白とはいっても光り輝く訳ないし。

なによりあんなに大きくな。アモルは確かに小柄だが、すっぽりと覆えるほど大きい狼は聞いたことがない。

うーん。世の中にはまだ知られていないものがたくさんあるんだろうか。

瞼を閉じたままで、腕を組み首を傾げるアモルはの前で大きな音がした。

目の前には大きな箱が出現していた。

大きな箱？

「おい」

はあ？と横を向くと、これまた腕を組んだジョイナスが立っていた。  
開けろって？

促されるまま箱を開ける。やだなあ、蛇とか蛙とかだつたら。  
アモルの中でジョイナスは嫌がらせ用員だつた。

もう恐怖は感じていなが、それでも近くにいられるすら嫌で。

開けるしかない。腹をくくる。

「へ？」

そこにあつたのは丸いケーキ、らしきもの。毒？

美味しそうな苺タルト。毒には見えない。

ジョイナスは苺タルトを箱から取り出すと、どこから取り出したのかナイフとフォーク、それから皿を出した。  
丁寧に切り分けていく。

皿に載せられ、フォークも前に置かれる。

「こないだは悪かつた。どうか食べてくれないか」

本当に悲しそうな顔をしている。演技か？本心か？

演技だとしたら毒…。

くそう。まだまだ死にたくないのに。

意を決してパクリと一口。普通に美味しい。むしろ普通じゃないくらい美味しい。

「上手いか？城のパーティシエを作らせた

「はい」

嬉しそうな顔をするのはやめてくれ。

美味しいと嫌いの間で地獄を味わつた。

ジョイナスはこんなことをしている自分が不思議でしうがなかつた。

ご機嫌とりのような真似、普段だつたら屈辱だ。

罪悪感から始まつたのに、この少年が気になる自分がいる。

今朝、明朝の訓練をしようと城内を歩いていると、庭園に不振な影が見えた。

不審者だと思い、剣を携え向かつた先で驚いた。  
倒れている人影。

近づくと、レイチャエルのお気に入りの少年だつた。  
顔を覆つた腕をつかみ、起きあがらせようとする。  
ぼんやりした顔にはうつすらと涙の跡。

露に濡れている体が少し震えているのに気づく。  
寒いのだろうか。声をかけて肩に手をあく。

アモルが少し動いた時に、首筋が見えた。  
白く細いそれに赤い跡がついている。  
傷跡から血が少し垂れている。

その首は、と言つといきなりアモルは立ち上がつた。  
こんな状態で一人にする訳にはいかない。

どうしてここにいたのか、何をしていたのか。聞きたいことは山ほどあつたが、なぜか聞けなかつた。

強引に送ると、引つ張つて歩く。

手首も細い。折れそうだ。

再びこの体にしたことが思い出された。何度謝つても足りないかもしれない。

医務室に無事送り届け、朝の訓練に向かつた。内にあつた罪悪感を消してしまいたいというよつて、かかつてくる部下を打ちのめす。

終わると、まわりは倒れた部下たち。その中で一番小柄な奴に近づく。首、はもつと細かつた。手首、ももつと細かつた。

ジョイナスが触つていると、後ろから声がした。

「とうとう男色に走つちまつたんですか、たいちよー」ふざけた声が耳障りだ。

「つるさい。そんな訳ないだろつ」

副隊長が顔をのぞき込んでくる。

にやにやと笑つた顔を邪険に払う。

「だつてその触り方、イヤン」

「気持ち悪い」

俺はレイナル様をずっとお慕いしていたんだ。結ばれたいとは思つてもないが。

あの方が幸せならそれでいい。だから決して男色ではない！

「まあ騎士の中には男色家もいますからね。不思議なことではないですよ。隊長素直になつたほうが楽です」

俺が男色？冗談。

「小柄な奴の体の細さを確かめたかっただけだ」

「その言い方、エロ」

ぼそっと言われた言葉に顔がひきつる。

まさか俺が？

アモルが頭に浮かぶ。

ああ、あいつが女だつたら…？

やばい。そう思う時点で重症だ。

ジョイナスがアモルのことを頑なに男だと思いこむのには理由がある。

男尊女卑の傾向が強いこの時代に、女が一人で仕事をするのはあり得ない。

それに格好も格好だ。あれじゃ少年にしか見えない。

さらに、貴族やその従者にはもつときれいな顔で、美少女にしか見えない奴もいる。そっちの方が女だと言われても納得ができる。それに紛れているアモルはやはりただの少年だつた。

また、ジョイナスはずつとエリーゼが好きだつたため、女とはああいうふわふわして柔らかいものだと思っていた。

アモルはもつと、鋭利な感じがする。

ただ、あの涙の跡がついた顔は、間違いなく少女のもので。普段は少年らしいのにその落差が。

…落差が何だ。

自分の思考がコントロールできない。俺は何を考えている。もうあまり考えたくない。

別にあんな少年のことは嫌いなわけではない。むしろ嫌われているだろう。

しかし、やう思ひと苦しくなる。

せめて嫌われたくない。

「なあ、嫌われている奴とはどうしたら仲良くなれる?」

やつぱりと言い副隊長はにっこり笑った。

「贈り物とか、どうでしょ?」

普通女に贈り物ならばドレス、貴金属。しかし男なのだから、何がいいのか。

そういえばスコーンを美味そつと食べていた。甘いもの…。

駆けだした俺をみた副隊長がその後すぐ騎士全員に噂を広めたことを後で知ることになる。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7535j/>

---

キューピッドの鎖

2011年10月9日19時48分発行